

るはせて少し弱りめに成たる時、足場よろしき所にてわきざしをぬきて、しりの穴にさし通し、下はらの皮をさけば、けして仕とめぬことなしと云しと也。

〔著作堂一夕話〕應舉が臥猪并野馬の話

丸山應舉に臥猪の畫を乞ふものあり、應舉いまだ嘗野猪の臥たるを見ず、こゝろにこれをおもふ、矢脊ヤセに老婆あり、薪を負てつねに舉が家に來る、應舉婆に問、爾野猪の臥たるを見たるか、婆云、山中たま／＼これを視る、舉云、爾かさねてこれを見れば、やくわれにしらせよ、篤く賞すべし、婆諾す、一月ばかりありて老婆が家のうしろなる竹篁中に野猪來りて臥す、略中舉すなはち筆を

採てこれをうつし、婆に謝してその夜家にかへり、その、ちこれを清畫して、工描既にと、のふ

時に舉が家に鞍馬より來る老翁あり、この翁めづらしく來ぬ、舉こゝろに臥猪の事をおもふ、略中

略舉畫するところの臥猪をしめして云、この畫如何、翁熟視することや、ひさしくして云、この

畫よしといへども、臥猪にあらず、是病猪なりといふ、舉おどろきてそのゆるを問、翁云、凡野猪の

叢中に眠るや、毛髮憤起、四足屈蟠、おのづからいきほひあり、略中こゝにおいて舉さきの畫をす

て、更に臥猪を圖す、工夫もつはら翁が口傳によれり、四五日ありて矢脊の老婆來ぬ、舉さきに

見たりし野猪をとへば、婆云、あやしむべし、彼野猪その詰朝竹中に死たり、舉これを聞て、いよいよ

翁が卓見を感じ、ふた、びそのおとづれをまつに、一句ばかりを経て、翁又來ぬ、舉後に圖する

ところの畫幅をひらきて、これを見せしむ、翁驚歎じて云、是眞の臥猪なりと、舉よろこびて、あつ

く翁に謝す、その畫もつとも奇絶なり、今なほ京師某の家にあり、舉が畫に心をもちゐしこと斯

のごとし、嘯風亭話

〔秋齋問語〕三總別武具に猪目を明る事、猪は豪獸にて食苦不避之物也、兵士遇辛苦強敵不避之象

にたとふ、松殿關白記に書れたり、又秋の寐覺下卷に云、院の御覺他に異なりとて、高ぶる心おは